

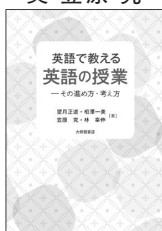
## 英語で教える英語の授業

その進め方・考え方

望月正道・相澤一美・笠原 究・林 幸伸 著

A5判・202頁  
本体1,800円＋税

[評者]  
今井裕之



### 「英語で授業」の Why & how がわかる

教育政策は、時としてキーワードだけが先行流布し、思いがけない解釈を生み、あらぬ方向に進んでしまうことがある。本書の取り上げる「授業は英語であることを基本とする」についても、これほど明確で誤解のないものであっても、その意義や方法 (Why & How) を考え、実践し、省察を教員間で繰り返していかなければ、教員も生徒も日々戸惑い苦しむ結果になってしまう。本書は、教員養成、語彙習得、評価論、指導法や教材論など多面的な専門分野を背景に持つ英語教育研究者が、キーワード「英語で授業」を、その意義や具体的な方法について丁寧に解きほぐす待望の書である。

第一部 「英語で授業」の考え方 では、読者の Why? にこたえる。認知主義的な第二言語習得モデルを基礎としつつ、理論に終始せず、より具体的な指導技術と授業展開にまで解きほぐされている。第二部 「英語で授業」の構成要素 では、第一部で示された「英語で授業」の授業展開に沿って授業実践事例が提案されている。ウォームアップ、新教材提示・説明・練習、コミュニケーション活動、発展活動及び評価ま

で、それぞれについて教員と生徒の発話事例、イラスト、ワークシートなどを示して授業場面が描写されるので、具体的にイメージしやすく、授業を疑似体験しているようで面白い。新教材提示では、フォーム (文法) 指導とコンテンツ中心の指導の両方が取り上げられていて手厚い。コミュニケーション活動でも、インフォメーションギャップだけでなくオピニオンギャップ活動が取り上げられていて充実している。第三部 4 技能別の「英語で授業を行う」ポイント では切り口が技能別に変わる。各技能の認知プロセスモデル、指導上重要なポイント、指導案事例の順に提示される。各技能での指導手順やその際の語彙の取り扱い方などが、理論的にも具体的にも (生徒の学習方略や典型的なエラー事例など) 丁寧に解かれていて、固い理論が順を追ってほぐれていく。技能別ではないが、中学校の指導事例も掲載されている。第四部 授業を振り返る視点 は、授業外での教員の取り組み (授業省察、トレーニング、生徒の家庭学習支援) について、簡潔ながら具体的に何をすべきかがまとめられている。

「英語で授業」について賛否はあるが、本書は賛否の議論を超えて、英語授業改善を目指す教員すべてに有益である。「英語で授業」に否定的な読者も、第三部を読み終わる頃にはおそらく「明日の授業でこれ試してみよう」と授業改善を目指す人になっていると思う。現職教員だけでなく、教員養成課程で学ぶ学生、教員養成に携わる研究者にも是非薦めたい「タイトル以上の本」である。

(いまい ひろゆき・関西大学教授)

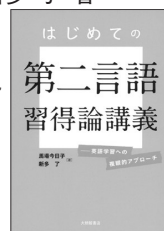
## はじめての第二言語習得論講義

英語学習への複眼的アプローチ

馬場今日子・新多 了 著

A5判・218頁  
本体1,900円＋税

[評者]  
白井恭弘



### 気鋭の SLA 研究者による、最新の第二言語習得論入門書

2012年に大修館書店から『英語教師のための第二言語習得論入門』という第二言語習得の概説書を出版させていただいた。その本を書いたきっかけは、2008年に出した岩波新書の『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』が、一番読んでほしいと思っていた英語の先生方にあまり読まれていないという話を聞いたことである。実際、第二言語習得 (Second Language Acquisition=SLA) という研究分野について、何も知らずに英語を教えている英語教師は多いし、ある程度知っていても、SLA は second language だから、日本のような外国語 (foreign language) 環境では関係ない、などと間違った認識を持っている人もいるようだ。

2016年に発行された本書は、SLA の初期から最新の研究まで網羅しており、拙著を読んでいた方にも、そうでない方にもおすすめできる。

本書は以下の10章から成る：第1章 第二言語習得研究とはなにか、第2章 なぜ人は言葉を習得するのか、第3章 母語と第二言語はどのように影響を与え合うのか、第4章 第二言語習得はどの

ように始まったのか、第5章 第二言語学習についての2つの見方、第6章 第二言語習得研究と外国語教育、第7章 どのような人が第二言語学習に向いているのか、第8章 どうすればやる気を持続することができるのか、第9章 英語学習は早く始めるべきか、第10章 第二言語習得の新しい考え方。

各章では、それぞれ2つの考え方を対置し、それらを元に読者が自らの考えを深められるようになっている。たとえば、第2章ではチョムスキーとトマセロの言語習得理論が比較対照されている。

また、本書の10章で取り上げている複雑系理論は、最近のSLA研究で注目を浴びている考え方であり、教室における学習者の習得過程を理解するうえでも非常に有効である。

また、本書では、「具体的な例を挙げる」ことを標榜しているが、これは非常に重要なことで、いくら難しい理論を学んでもそれが日常の学習者の活動と結びつかなければ、教育実践の向上に役に立つ可能性は低いであろう。その意味で、本書を読み進めることにより、理論と実践をつなげるという習慣が身につく。

著者は気鋭の第二言語習得研究者で、それぞれイギリス、カナダの名門大学で博士号を取得、一流海外ジャーナル(Language Learning, Language Testing)などに論文を発表している。本書は信頼できる1冊といえよう。ぜひ一読をおすすめしたい。  
(しらい やすひろ・ケースウエスタンリザーブ大学教授)

## ガーデニングとイギリス人 「園芸大国」はいかにして つくられたか

飯田 操 著

四六判・360頁  
本体3,300円＋税

[評者]

磐崎弘貞



### ハイパーガイドブックにもなる 研究書

これまでも、パブ、愛犬、釣りなどを通して英国のイングリッシュネス解明に迫ってきた著者が、次に選んだトピックが庭だ。

英国庭園については、私には従来いくつか謎があった。たとえば、イングランド北部のマナーハウス、ハワード城は、主ホールの美しさに加えて、大陸風の大庭園そのものも壮麗で何度行っても飽きない。その点、本書の口絵にもなっているチャッツワースでは、階段状の人工滝を持つ小高い裏庭に座って前方を見ると、おそろしく広大で牧歌的な風景が広がり、あたかも自分が風景画の一部になったように感じられる。明らかに風景の見せ方が違うのだ。ならばと、英国庭園愛好者のメッカとも言えるヒドコートマナーガーデンにも行って見たが、今度は草木の配置があまりに「自然流」で、貧相に見えてしまうのだった。「すいませんが、この庭のどこがすばらしいのでしょうか」と横にいた老夫婦に丁寧に聞いたつもりだったが、むっと呆れられたのを思い出す。

本書を読み進めると、こうした状況の背景がパズルを解くように見えてくる。その語りは歴史的な

概観を基軸としており、本来岩だらけの島だった英国に海外から植物が持ち込まれ始める16世紀以前、王侯貴族がヨーロッパの影響で大庭園を造り始める16～17世紀、英国独自の庭園意識が芽生える18世紀、風景庭園の反発も出始める19世紀、そして新しい「イングリッシュ・ガーデン」が胎動する19世紀末～20世紀、平和な花作りが始まる1920年以降という構成となっている。

これによって、「英国民＝ガーデニング好き」といった単純な構図の背景には、実は政治的・経済的な策略や権力誇示が大きく影響していることを知らされる。たとえば、土地の持つ美的な可能性(capability)を追求する庭師ケイパビリティ・ブラウンは、貴族の庇護のもと、丘や樹木や川の流れまでも変え、場合によっては村全体(!)を移転させた上で、あくまで<自然な>風景庭園を追求した。その一方で、庶民による「古き良きイングランド」への回帰を目指すコテージ・ガーデンも、現在のイギリスには同居しているのである。どれも「これこそが英国の庭園だ」と言えるわけではなく、それぞれがその時代の特徴を反映しているわけだ。

本書には、資料画や写真も多く、何といっても索引が完備しているので、実は、庭園・古城・マナーハウスに興味を持っている人にとっては、観光ガイドブック以上の情報を得られるハイパー・ガイドブックにもなってしまう。ぜひ、持ち出す研究書としても活用いただきたい。そして、本著者の次なる「イングリッシュネス」解明のトピックに期待したい。

(いわさき ひろさだ・筑波大学教授)